
異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ...

何かを探す人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ…

【Nコード】

N2446BA

【作者名】

何かを探す人

【あらすじ】

主人公「黒羽蓮」は少女を助けてトラックに跳ね飛ばされたら森の中にいた。「いやおかしいだろ」これは主人公が「無視か？」異世界でどんなことをしたのかをなぞったものである。「おい！」「うるさい！！」「…すいません」

第一話 異世界へ（前書き）

この小説は処女作です。

日本語、及び創作が苦手な作者なので、大変読みづらい文章となっております。

また、物語の展開がおかしいところもあるとおもいます。それでもよろしいかたは下へスクロールしてください。

でははじめます

第一話 異世界へ

「……は？」

俺はどこにでもいる普通の高校生「黒羽蓮」だ。

高校から帰る途中、道路に転がって行ったボールを追いかけて道路に飛び出してしまった少女がいた。

その後ろからトラックが走ってきたのを見た俺は、

思わず少女に駆け寄り、少女を道路の脇に跳ね飛ばした。

かなり強く押したからかなり痛いと思うがそれは道路に飛び出した自分の責任だと思ってもらいたい。

んで、少女を助けた俺だったが、少女を助けることばかり考えてそのあと自分がどうやってトラックを

かわすのかを考えていなかった……

「焦ってたとはいえあの時の俺あほすぎるだろ……」

……ま、まあ少女が助けられたから後悔はしていないからいいんだが……

「で、その後トラックにはねられたんだよな。」

んで、跳ね飛ばされて地面に体がついたと思ったら森の中で立ち尽くす……

「どこかで聞いたことのあるような展開だなこれ」

俺はよく主人公がファンタジーな異世界へ飛ばされて冒険するって
いう小説を読むが、

そのときに異世界に飛ばされる理由がトラックに轢かれたからって
いうのが多かった気がする……

「で、ここはどこだ？周りは木に囲まれてる・・・なんだこのメモ」

・・・

「・・・なんとというテンプレ」

このメモによると、やっぱり俺は死んだらしい。

まあテンプレだが原因は神の書類ミスのようにだ。

んで、死なせてしまったお詫びとして異世界に転生させたようだが、どうやら元の俺の体はグシャツとなってしまうって使えなかつたらしい。

なので神が直々に俺の体を作りなおしてそこに俺の魂を入れて復活させたのが今の俺の状態らしい。

この紙には「その体ならばこの異世界で困ることはあんまりないでしょう」と書かれているんだが・・・

「正直こええぞ・・・いままで使ってきた体と違う体ってのは」

この体、神が作ったというだけあってかなりスペックが高い。

試しに走ってみると、30分近くも走っても全く息切れせず（時間は腕時計で測った）、

ジャンプすれば5m近く跳ぶことができた。

・・・あまりの高さに焦ってしまい着地をミスったのは内緒だ。

「まあ体の調子にはおいおい慣れていくとしてだ。魔法があるってのは予想外だったな・・・」

そうなのである。

この世界には魔法が存在して、戦いの道具として使われているらし

い。

「・・・なんとというファンタジー。っていつか俺も魔法使えるんだろっか」

このメモには魔法の基本的な説明と、いくつかの魔法の詠唱が書いてあった。

このメモによると、この世界の魔法は、自分の内に存在する魔力・
・これをオドと呼ぶらしい。

をつかい、そのオドを詠唱によって練り上げ、それを魔法という形に変えていくというのが基本らしい。

また、魔力はオドだけではなく、大気の中にも存在しており、これをマナと呼ぶらしい。

上級者になると、自分の内からオドを発し、それをマナと混ぜ合わせて大規模な魔法を発動するそうだ。

魔法は属性と階級によって区別され、

属性は、火、水、氷、地、風、雷の基本六属性と光と闇の上級属性、そしてその他の特殊属性。

階級は、下級、中級、上級、特級、超級、最上級の六階級に分別できるとらしい。

また、それ以外にも特殊な魔法として、精霊魔法や古代魔法など、普通の人では発動できない魔法も存在するようだ。

また、魔法はイメージさえできればどんなことも起こせるようで、オリジナルの魔法というものも存在するらしい。

「ま、物は試しだ。やってみるか」

これから試す魔法は（ウォーター）という水属性下級魔法で、

対象の頭の上から水を落とす魔法らしい。

「よし・・・」

来たれ水よ 敵に降り注げ ウォーター！」

詠唱を唱えると、自分の内からなにかが湧き上がってくるような感覚がした。

・・・多分これがオドだろう。そのオドが詠唱が進むにつれて自分から放出されて目標の上を集まり、水となつて、魔法名を唱えると落ちた。

「んー・・・出て行った魔力が全て使われるってわけではないのか？」

出て行った魔力が全て集中したわけではなく、体から放出されたあと、そのまま大気中に拡散していった魔力も存在した。

「まあ練習すりゃさういつた魔力も制御できるようになるだろ。とりあえずいまは他の魔法の効果を見てみるかな」

俺はメモに書かれている全ての魔法を発動してみることにした。

・・・

「ふいーおわつたー」

魔法というものに初めて触れたせいか、ついつい練習に没頭してしまつた。

「ま、とりあえずこれでメモに書かれた魔法は全て発動できたか」

メモに書かれていたのは

| | |
|--------------|---------|
| (ウォータ) | 水属性下級魔法 |
| (スプラッシュブレッド) | 水属性中級魔法 |
| (ファイア) | 火属性下級魔法 |
| (メルトストーン) | 火属性中級魔法 |
| (フリーズ) | 氷属性下級魔法 |
| (グレイブ) | 地属性下級魔法 |
| (ウインド) | 風属性下級魔法 |
| (ウインドヒール) | 風属性中級魔法 |
| (ボルトショック) | 雷属性下級魔法 |
| (プラズマソード) | 雷属性下級魔法 |
| (チェック) | 無属性下級魔法 |

の11個だった。

一応全部発動することはできたが、制御が甘く、なかなか思った通り発動できなかった。

しっかり発動したのはイメージしやすかったプラズマソードだけで、魔法を使うにはイメージが大切だということが理解できた。

「特にメルトストーンを発動した時はヤバかった・・・まさか溶岩が噴き出るとは」

あのときはやばかった・・・

地面がいきなり茹って溶岩が噴出し流れていったのにはビックリしたとっさにウォータの魔法を使って出てきた溶岩を全て固めたからよかったものを

あのまま流れっぱなしだったらここら辺一帯が原因不明の大火災になっただろう。

「まあそこら辺は要練習。とりあえず眠い・・・もう夜だし」

メルトストーンを使ったときの後始末で精神的にかなり疲れた・・・まあそのおかげで魔法の危険性と便利さをよく理解することができたが。

「とりあえず今日は寝て明日ここを出るか・・・」

溶岩を追いかけていったらちょうど街道もみつかったところだし

まあ街道といっても草原にそこだけ草が生えていないってかんじの道だな

「枝を集めてつと・・・よし、これくらいでいいか。」

燃え上がるは 炎なり ファイアつと

枝を集めてファイアの魔法で火をつけ、たきびを作った。

「あつちの常識が通用するかはわかんねーけど動物は火を怖がるもんだからな」

森の中にあつた果物（チエックで鑑定済み、リンゴみたいなもの）を夕飯代わりに食べて、

俺は明日に備えて寝ることにした。

「ふう・・・しかしあつちで生きてたときには野ざらして寝るなんて考えらえなかつたな・・・」

幸い地面にはやわらかい草が生えており、寝ることはできそうだ。

「まあどうでもいいや・・・色々あつて疲れた・・・おやすみ」

俺はすぐに寝付いた・・・

第一話 異世界へ（後書き）

黒「さて作者……」

はい……

黒「なんだこの見づらくてなおかつ無茶苦茶な文章は！」

いや、ほんとすいません。

他の人の小説をみて自分も書いてみたいなーとおもって書き始めたら
まあこれがむずかしい

黒「んなこと自分の文章力のなさから考えればわかることだろうよ・
……」

し、しかたないじゃないか！書きたかつたんだから……

黒「はあ……まあこれから頑張つて上手くなる気はあるんだろ
う？？」

うん、こんな文章じゃ見てもらう価値がないからね

黒「んじゃ頑張つてはやくうまくなってくれよ？」

はい。

それではまだ主人公のキャラ設定もあやふやなこの小説ですが
よろしくおねがいします。

黒「……えー」

第二話 戦い（前書き）

さて、二話目です。

あいも変わらない駄目文章ですがよろしくおねがいします。

ではじめます。

第二話 戦い

「あさかー・・・ねみい」

一夜たつて、起きた俺を迎えたのはそれは眩しい朝日だった。

「さて、一晩ぐっすり寝て体力も魔力もすっかりかいふくしたし、そろそろここを離れるとするか」

どうやら魔力は体力と同じく休憩すれば回復するようで、特に寝れば大きく回復するようだ。

「さーて、どっちに行くとするかなー」

昨日確認しておいた森からほど近いところにあった街道は、右に向かえば平原に続く道をなだらかにくだっていき、左に向かえば登り道で、その先には山があった。

「・・・ここは右だな。好き好んで山に行きたくはないし」

というわけで俺は右へ進んでいくことにした。

・・・

「しかし・・・きれいに平原しかないこの道」

歩いて行く道の先に広がるのは雄大な草原。

元の世界では考えられないほど広大だ。

「まあ街道があるってことはとりあえずここをあるいていけばいずれは町に着くんだろが・・・」

見渡す限りの草原。モンスターが出るかもしれない、という危険もついつい忘れそうになるほど
障害物がなく、広い。

「・・・ん？」

のほほんとゆっくりあるいていた俺の耳に音が入ってきた。

「これは・・・人の声！？しかも悲鳴混じりだし！・・・ちっ！」

俺はその音が聞こえた方向に向かって走って行った。

・・・

「・・・なんだよ・・・これ」

たどり着いた場所してみたものは・・・

賊と思わしき人が20人ほどで鎧を着けた人3人をいたぶっていた。

「くそ・・・どーなってんだこれ・・・俺はどうすればいいんだよ・・・」

賊に加わるのは問題外。

かといって騎士に加勢して賊を倒すのも無理が・・・

「くそっ・・・あつ、おい！大丈夫か！？」

賊たちと騎士たちが戦っている場所から少し離れた場所に騎士の仲間と思わしき人が倒れていた。

「おい、しつかりしろ！」

「・・・ぐ、ううっ！」

「目が覚めたか。待ってる、今すぐ治癒魔法を・・・

癒しの風よ 傷つきし者を包み込みて 争いの傷を消さん！
ウインドヒール！」

「う・・・ぐっ」

「な、なんでだ！なんで効かねえ！？」

「ぐっ・・・無駄だ少年よ・・・私の傷はどうやら手遅れのようだ」

「そんなことねえ！もう一度・・・！」

「私の、くっ、ことはいい・・・それよりも少年よ・・・ぐっ
ひとつ頼まれてくれんか・・・」

「ああ！なんだ？おれにできることならなんでもしてやる！」

「賊が私たちを襲ったのは、ぐっっ、私たちの身なりをみて、
金になるものがあると見たからだろう・・・」

「頼む少年よ・・・財宝はどうでもいい・・・ただあのお方だけは、
あのお方だけは賊の手に渡さないでくれ・・・」

「ああ！絶対に渡さねえ！そのあのお方っていうのはどこにいるんだ！」

「ありが・・・とう・・・あのお方は、馬車の中に・・・」

「おい！？おい、おっさん！起きろおっさん！」

「頼んだぞ・・・少・・・年・・・よ・・・」

「おっさん！！！？・・・くそっ！！！」

俺は目の前で死にかけている人一人救えねえのかよ！

「・・・心配すんなよおっさん、ぜってえにそのお方っていうのは救ってやる」

「自分が死にかけてるっていう状態でその人のことを心配するほどおっさんにとって大切な人なんだろう」

「ならぜってえにその人は助ける！それがおっさんを救えなかったことへの罪滅ぼしだ！」

おっさんが死んだときに他の騎士も倒されてしまったらしい。

賊たちは馬車についている美しい宝石や装飾品に夢中になっていた。

「・・・不思議だな・・・さつきと同じく、

いやさつき以上に不利な状況なのに、全く怖くねえ・・・」

どつやら、俺は思ったよりもおっさんを目の前で死なせたことには
らをたてているらしい。

「・・・覚悟しろよ賊たち。俺の覚悟は決まったぜ？」

雷は敵を切り裂く剣とならん プラズマソード」

覚悟は決まった。武器もある。あとは戦うだけ・・・

「・・・不動黒羽流 黒羽蓮！ 参る！」

・・・

「・・・ふっ」

賊に向かって駆けだした俺はまず近くにいた賊を斬る。

「な、なんだてめえ・・・ぎゃあっ！」

・・・1人

「はっ」

「ぐわあっ」

2人

「次！」

2人斬った後、その近くにいた6人の賊へ駆け寄る。

「な、なんだこいつ！おい！まだ一人いたぞ！」

賊たちに気づかれ全員が俺の方に寄ってくる。

「だが・・・遅いつ！」

「ぎゃあっ！」

「ぐわっ！」

一閃の内に3人の賊を叩き伏せ、返す刃で残りの3人を切り捨てる。

「お、お前よくもやったな！お前ら、かかれー！！！」

「「「うらー！！！」」」」

8人の仲間がやられたのを見て、賊の頭と思わしき人物が他の仲間
に指示を出す。

その指示を聞いて残りの11人も賊が俺に向かってくる。

・・・だが、それは俺の狙い通り。

俺がこの戦いで負ける条件は誰かに動きを止められること。

だれかを犠牲にして他の仲間を俺を倒すなんていう作戦をとられた
らやばかったんだが・・・

どうやら杞憂に終わったらしい。

たとえ人数が多くても一方向から一斉にむかってくるならば・・・！！

「不動黒羽流遠攻術亜流！ 斬空刃・雷！」

「「「「ぎゃああああああ！！！！！」」」」」

「・・・こうやってプラズマソードに魔力を大量に込めて放てば、巨大な雷の刃を放つことで1人くらいなら倒すことができる。」

「な、なにもんだてめえ・・・俺の仲間をこの一瞬で全員倒すだど・・・！？」

「・・・賊に名乗る名は無い」

「くっ、ちくしょおおおお！」

やけになったのか頭は剣を抜き、こちらへ走ってくる。

「終わりだ・・・不動黒羽流 絶牙」

「ぐはっ・・・ちき・・・しょう・・・」

バタッ

・・・プラズマソードで突き殺した頭が倒れる。

「ふう・・・終わったか・・・人・・・殺してしまったな・・・」

思ったよりも人を殺したことに對する罪悪感が少ない・・・
神がなにかしたんだろうか・・・

「今はそれに感謝しておこう・・・だが、殺したことは忘れない。」

たとえそれが賊であつてもだ・・・」

人を殺した事を忘れ人を殺すことに慣れてしまつたらおわりだ。

「・・・そうだ、おっさんに頼まれた・・・」

賊を殺したことで忘れそうになっていたが、
そもそもの目的はあのお方とやらをたすけることだったな・・・

「えっと、馬車の中だっけ・・・」

馬車に飛び乗り、幕を開けて中の様子を見る。

そこで俺が見たものは・・・

「・・・（ブルブル）」

・・・ブルブルと震える金色の髪が美しいかわいい少女だった。

第二話 戦い（後書き）

ぶふっ！「不動黒羽流 黒羽蓮！ 参る！」だってさー（笑）

黒「てめーが書いたんだろっつがよ！さくしゃあ！……！」

いやーしかしまさか剣術使いの主人公とは

黒「思つてなかつたんかい！」

うん、途中で演出どうしようと思つて剣術入れればかっこよくな
思つたのが
入れた理由

黒「しかも理由がかっこいいからって……」

まあいいじゃないか。

んじゃ主人公、剣術の説明よろ。

黒「俺がするのかよ……」

えっと、俺が使う不動黒羽流は、俺の家に代々伝わる剣術で、
発祥は室町時代だそうです。

1体多を基本とした剣術で、

イメージとしてはる剣の飛天御剣流がいいかと。

現代に入ってゲームやらアニメやらのこれは！と思つた動きや
技を加えている　　そうで、混沌とした剣術だそうです」

ほうほうなるほどねー

黒「・・・あんたが考えたんだろうが」

いやまあそうだけどね、ついでに今回出た技もよろしく

黒「あいよ、

まず一つ目の技（斬空刃・雷）は、

不動黒羽流 斬空刃を魔法型にアレンジしたもので、

自分の魔力を雷属性に変換して、剣にまとわせて刃状に放つ技で、

通常の斬空刃と比べると、かなり殺傷力が高い技になっています
また今回のこの技は、大量の魔力を込めたため大きくなっており、

20人くらいまでなら同時に倒せる大きさになっていました」

あれ？でも殺傷力なら風属性のほうが高かったよね。
こうスパッと斬れて

黒「まあそうなんだがな、今回は剣がプラズマソードだったから雷属性の

斬空刃にした。それに今の俺ではまだ普通の剣では斬空刃はうてないし」

ふむふむ・・・今回斬空刃を打てたのは剣がプラズマソードで

元から雷属性になっていて、

さらに自分の魔力でできた剣だから魔力が通しやすかったからうてたと。

黒「そういうこと。

で、もう片方の技、絶牙だけど、

あれは単純に走ってきた賊に向かって全力で突きをくらわせる

技

・・・終わりだとか言っておいて結構単純な技だねそれ

黒「だけど突くタイミングが早ければ外れるし、

遅ければ先に相手に斬られるから結構難しいんだぜ？

その分決まれば相手の勢いがそのまま威力になるから
ほぼ確実にたおせるんだがな」

なるほど・・・単純ゆえに難しいと

黒「まあそういうこと。」

解説は以上でいいか？」

OK・ありがとねー

では、説明ばかりで長くなりましたがこれで終わります。

これからよろしく願います。

第三話 出会いと始まり（前書き）

この小説は思い立ったときに書いています。

なので今日みたいに一気に登校する時であれば、
登校しない日もあるとおもいます。

そこを了承してお読みください。

では、第三話 出会いと始まり スタートです

第三話 出会いと始まり

「……………(ブルブル)」

……………さて、どうすればいいのだろう。

馬車の中には恐らくは恐怖に震えている少女がいた。

恐らくはこの少女がおっさんが言っていたあのお方だと思っただが……

「あ、あの一？」

「つつつつつ！！！(ガタツ)」

……………これである。

さきほどからなんとか意志の疎通を図ろうと話しかけているのであるが、

怖がってしまつて話が通じない……………

賊たちも全部倒したからこの少女が怖がる理由がイマイチ見えてこないんだが……………

「……………あ、あなたは……………」

「ん？なんだ？」

「ひゃー！…？」

「……(汗)」

「……あっちから話しかけてられてのに返事したら怖がられるって；

「……次話しかけられたら全部言い終わるまで返事しないことにするか

「……あ、あなたは……」

「あなたは私を殺すんですか？」

「……は？」

「……さて、どう反応すればいいのだろう。
まずなぜその結論に少女が至ったのかを少女の見方で考えよう。」

「……馬車で進む 突然賊に襲われる 馬車の中に籠る この馬車は外が見えないようになってい

喧騒がやむ 俺が中に入ってくる 俺がだれかはわからない
普通に考えると賊の仲間……

「……なるほど

「……君は俺が君たちを襲った賊の仲間だと思っているわけかい？」

「……(コクン)」

「あー・・・そういうことか」

確かにこの状況ならそう思ってもしかたないよな・・・

「あーっとな・・・俺は君の護衛の騎士たちに君たちを襲った賊から君を守るよう

頼まれて賊たちを倒して君を助けに来た。

で、賊は全て倒したんだけど・・・証拠のためにも見るかい？」

「・・・はい」

・・・

「・・・」

「・・・」

改めてみると悲惨な光景だな・・・

賊と騎士を合わせて24人が死んでしまった・・・

・・・この子だけでも守れたと思うべきか。

それとも俺の判断が遅くて守れた命を失わせてしまったと思うべきか・・・

「・・・君を守っていた騎士たちは最後まで君を賊から守ろうと戦っていたよ」

「・・・そうですか」

「・・・こういったときに気のきいたことが言えないこの身が疎ましい。

「・・・私を助けて下ってありがとうございます」

「・・・礼はいらないよ。俺は騎士たちを守ることができませんでした」

「それでも！・・・私を助けてくださったことに変わりはありませんから」

「・・・そっか」

「・・・この子は強いな。」

普通なら人の死を見れば目を反らしたくなるものなのにじっと自分の騎士たちを見つめている。

「・・・それで、君はどうするんだい？」

「・・・ここから一番近い町に向かいたいと思います。もともとそこに向かう予定でしたし」

「・・・ならば、俺を護衛に雇ってくれないか？」

「え？」

「実は俺さ、この地に来たばかりでこの辺の地理とか全くわかんねーんだ。」

だから君を守る代わりにこの辺のこととかを教えてほしい」

「教えるのはかまいませんが・・・そこは結構遠いですよ？」

「かまわない。どっちにしろ俺は街に行きたかったんだ。護衛くらいで道案内してくれるなら安いもんさ」

「ですが・・・」

「ん？」

「失礼ですがどのようなたたかうんですか？武器も持ってないようすし」

「あー・・・んとな、

雷は敵を切り裂く剣とならん プラズマソードっと、これでいいか？」

「え？あなた魔道士だったんですか？」

「魔道士・・・っつーのが魔法を使う人を指すのなら確かに俺は魔道士だな」

「そうなんですか・・・魔道士ならば充分な力ですね。では護衛よろしくお願いします」

「あいよー！」

こうして俺は助けた少女と一緒に行動することになった。

・・・

少女と一緒に歩き始めて数分のこと

「……気まずい……非常にきまずい……この少女と話すことが
ねえ！」

ひょっとしてこれからずっと無言？それはすごくまずい！……あ

「そついや俺達名前交換してねえな」

「あ、そうですね」

「しばらくの間一緒に行動するんだ。名前教えておくよ。
俺の名前は黒羽蓮だ。よろしくな」

「クロハ・レンですか？」

「あ……蓮がファーストネームで黒羽がファミリーネームだか
ら、」

レン・クロハなのかな？」

「レン……ですか。ではレンさんと呼びますね」

「それでいいよ。で、君の名前は？」

「はい、私の名前はミリア、「ミリア・スペルテナ・テレジアス・
フォン・フェレルシア」です」

「……なっがい名前。ていうかどっかのお姫様みたいな名前だな
(笑)」

「??そつですよ??」

「……はい?」

「・・・えっと、私の事知りませんか？」

「ああ」

「・・・えっとですね、私は「フェレルシア王国」の第三王女です」

「・・・なにぃー！！！！？」

「ひゃう！？」

「バカな！？ありえん！？」

「あり得ないと言われても事実なんですが！？（泣）」

「まずいまずいまずいって！？確かにいい身なりしてるけど異世界なら貴族くらいありえるだろうし」

「どっかの貴族のご令嬢かとは思ってたけどまさか王族とは思ってなかった！？」

「まずいって・・・」

「俺がこの世界に来て決めたことのひとつ「王族には関わらない」がこんなにも早くやぶれるとは！？」

「え？なんで王族と関わらないのだった？」

「王族に関わるとロクなことになりはしないってわかるからに決まってるだろーが！」

「俺は静かにくらしたいんだよ・・・（泣）」

「あ、あのー？」

「なんだよ!?!」

「ひゃう!?!」

「あ、悪い・・・不測の事態で混乱してつい怒鳴っちゃった。許してくれ」

「いや、それはいいんですが・・・
なにか私悪いことしましたか?」

「いや、君に悪いことはないよ。君が王女だというのが問題なんだ」

「?私が王女だとどんな問題が?」

「あー・・・とな、俺はあんまし目立つのが得意じゃないんだ
で、君が王女だと君を届けるときに目立つかもしれないだろ?
それが嫌なんだ・・・」

「そうなんですか・・・」

「・・・嘘は言つてはいないぞ?」

届けた時に兵に囲まれたりするかもしれないからな

「えっと・・・じゃあ護衛についてもらうのはやめてもらいましょ
うか?」

「・・・それも困るんだよな。ここで護衛から離れるとせつかくの街
への案内がなくなってしまう。」

「んー・・・じゃ、こうしてくれ。俺はこのまま君の護衛を続ける。」

で、君が向かう街の入り口についたら君を兵に預けて別れる。それでおしまい。

それでいいかい？」

「・・・わかりました。それでいいですよ」

「よし、んじゃ進むか。っていうか俺敬語じゃないけど大丈夫か？不敬罪で捕まえたりとかしないよな？もしそうなら敬語にするが」

「つかまえませんかそのままの話し方でいいですよ！？」

「おーよかったよかった。いきなりつかまったらどうしようかと思っただ・・・」

「・・・私そんな話し方ひとつで捕まえるような人に見えます？」

「いや、わからん。まだ出会ったばっかだしな」

「・・・そういえばそうですね、まだ出会って30分くらいしかたっていないんですね・・・」

「ふむ、俺が敬語じゃなくていいなら君も敬語じゃなくていいぞ？」

「いえ、私はこれが普通の話し方なので」

「へー・・・」

などとそんなことを話しつつ、俺とミアアの二人旅（旅なのか？）が始まった。

第三話 出会いと始まり（後書き）

黒「やつと街に進み始めたのか・・・」

だねえ・・・実は主人公、復活したところからそんなに動いてなかったり

黒「作者の力不足だろうか」

グハツ！！ さくしゃに 500ポイントのダメージ

黒「なんだこのテロップ・・・」

？「・・・大丈夫ですか？作者さん」

おお・・・ミリアは優しいなー・・・どこの主人公とは大違いだ
（ぼそっ）

黒「死んどけ プラズマランサー一斉放射」

ぐばばばばば・・・その・・・魔法は・・・まだ本編に

黒「出てきていないがここは時間のながれがないから大丈夫だ」

ミ「えっと・・・なんで作者は死んでるんですか？」

黒「気にするな」

ミ「えっと・・・」

黒「気にするな」

ミ「……はい（怖いよー！？なに言ったの作者さん！？）」

黒「さて、作者が死んでしまったので俺達で終わりたいと思う」

勝手に……殺す「プラズマランサー」うぎよぎよぎよぎよ！

黒「では駄文でしたが読んでいただいておりますがとうとうございます」

ミ「これからもよろしく願います」

第四話 異世界を知る（前書き）

しまった・・・日付が変わる前に投稿しようとしたのに間に合わなかった・・・

はい、四話目です。

これまでと同じく読みづらい文章ですが、それでもよろしいかたはお読みください。

それではどうぞ。

第四話 異世界を知る

さて、俺は周囲を警戒しつつミリアと会話をしながら歩いていた。するとミリアがこんなことを言い出した。

「しかし・・・フェレルシア王国の王女と言ったら結構有名なんですけどねえ・・・」

本当に聞いたことがないんですよね？」

「ああ、マジで聞いたことはねえ」

「マジ？とはなんですか？」

「あー・・・俺が住んでいた所の言葉で、本当っていう意味だ」

「うーん・・・マジ・・・ですか・・・聞いたことがないんですよ・・・」

「まあ聞いたことがないのも無理ないとおもっぜ？」

俺が住んでるところは多分ミリアたちのところとははなれてるだろうし」

「そうなんですか？というかレンさんってどこの出身なんですか？」

「んー・・・それを説明する前にまずこの世界のこととこの近くの事を教えてほしい。」

なんせいきなり転移で飛ばされたと思ったら知らないところに人ぼっちだったからな・・・

それに俺が住んでいたところではフェレルシア王国なんて国は存

在しなかったからね。

だからとりあえずこっちの常識を知りたいと思うんだが・・・」

さすがに一度死んだとか言っても信じてはくれないだろうしな・・・

「そうだったんですか・・・そういうことなら私がこの世界の事を教えましょう！」

・・・胸を張って元気よくそんなことを言うミリア。
どうやらこの子は困っている人を助けるのが大好きなようだ。

「ああ、よろしく頼むよ」

「それではまずはこの世界の地理のことを教えますね」

「この世界は大きく分けて3つの大陸でできています。
まず1つ目は私たちがいるこの大陸「アイビス大陸」」

「このアイビス大陸は主にヒトが住んでいます」

「ん？ヒトっていうことはほかにも種族がいるのか？」

「はい、この世界には主にヒト、エルフ、ドワーフ、竜人、冥族、
獣人の6つの種族がすんでいます。」

各種族の説明はあとでしたいのですがそれでいいですか？」

「ああ、頼むよ」

「続けますね。アイビス大陸は基本的にはヒトが住んでいますが、
それ以外の種族も数多く住んでおり、種族の融和が進んでいる大

陸です。

また、このアイビス大陸を4つに分けるように国が分かれていて、右下の「ルクセリア共和国」左上の「レジエンディウス皇国」左下の「アマルフィア帝国」

そして、私たちがいるここ、右上の「フェレルシア王国」「に分かれています。

4つの国にはそれぞれ色と旗印にしている特徴があり、簡単に説明すると、

ルクセリア共和国は緑色で共和を旗印にしており、
レジエンディウス皇国は青色で旗印は信仰です。

アマルフィア帝国の色は赤で、旗印は争乱にしており、
フェレルシア王国は黄色で団結を旗印にしています。

そして国ごとに司っている属性があり、国の色がこれを表します。
緑のルクセリアは風を司っており、青のレジエンディウスは水と
氷。

同じように、赤のアマルフィアは火を、黄のフェレルシア王国は
地と雷を司っています。

一気に言いましたが大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない、続けてくれ」

「はい、4つに分かれている国の力はほぼ同じで、この4つの国が
それぞれ均衡していることで

平和が保たれています。また、4つの国にはそれぞれ得意する分
野が存在し、

ルクセリアは農業を、レジエンディウスは学問を、

アマルフィアは軍事を、フェレルシアは商業を得意としています。

4つの国はそれぞれ足りない所を補い合っていますので、
どの国もなくてはならないものになっています。

この大陸については以上ですがよろしいでしょうか？」

「ああ」

「そういえばもうひとつありました。」

「国の王族はその国が司っている属性の適性が必ずあります。」

「そして、王の一族は必ず髪の毛の色がその国が表す色になります。」

「ふーん、だからミリアの髪はきれいな金なのか・・・」

「あ、ありがとうございます・・・／／／」

「つ、続けますね・・・」

「あ、ちょいまち、適正ってなに？」

「えと、適正というのはですね、魔法をどれくらいの力で扱えるのかを表すものです。」

「これは段階でわかれています、」

「その属性の魔法は全く使えないFからE、D、C、B、A、Sと上がっていきます。最高はSです。」

「適性が高ければ高いほどその属性の魔法を使いこなすことができ、威力があがっていきます。」

「とはいえ普通の魔道士だとDくらいが普通で、熟練といわれる魔道士でもBくらい、」

「大魔道士と呼ばれるような人たちでもAがあればいいほうだといわれます。」

「S適性持ちの人はそのほとんどがなんらかの形で歴史に乗っているような魔道士ばかりで、」

「そういった人たちを「偉大なる魔道士」とよびます」

「なるほど・・・ミリアの適性はどうなってんの？」

「私はですね・・・雷がB、地がC、水がDで他はすべてFです」

「ふむ・・・それってすごいほうか？」

「私はいあんまりそうは思いませんけど・・・かなりの方だということですよ？」

「へえ、すげえな・・・ん？てことはだ・・・俺いる意味無し？」

「いや！？そんなことないですよ！？それに私戦ったことありませんし！」

「レンさんがいないと私困りますよ！？」

「そ、そっか・・・そりゃよかった・・・」

「め、迷惑とか思われていなくてよかった・・・」

「まったく・・・本当にいないと困りますからね？いなくならないでくださいよ？」

「あ、ああ、わかった」

「それでは次の大陸の説明に入ります。次の大陸は「ゼクンディウス大陸」です。

この国は主に冥族が支配しています。

長い間アイビス大陸の国と争っていましたが、

現在はアイビス大陸の4つの国全てと友好条約を結んでいます。

この大陸には国は1つしか存在せず、その国が大陸のすべてを支配しています。

国の名前は「ラグレスティア国」といいます。

あまりこの国の情報はないのですが、

これは絶対に正しいと言えることはのは王族は闇の魔法を使い、髪の色は銀ということだけです」

「・・・その情報いるかい？」

「ま、まあいいじゃないですか。知って困るようなものでもないですし」

「まあいいけど・・・んで、最後の大陸は？」

「えーと、最後の大陸なんですが・・・」

「どうした？」

「この大陸について知っている人ってごく少数なんですよね・・・」

「なぜに？」

「理由としてはこの大陸との交流はないんですよね」

「行った奴はいないのか？」

「いるにはいるんですが・・・」

その大陸に向かった者で帰ってきたという人はいないんですよね・

「・・・」

「・・・ホントに？」

「そう言われていますよ。あとは神がいるとかどうとか・・・」

「神がいんのか!？」

「ひゃう!?!い、いきなり大声を出さないでください!」

「わ、わりい・・・」

「全くもう・・・一応そういう風に言われているみたいですよ。確認したことがある人は誰もいないそうですが・・・」

「つまりいるかどうかはわからねえってことか?」

「はい」

「ふーん・・・」

神、ねえ・・・元の世界とは違う神だとすれば・・・
その神はいきなりこの世界に現れた異物である俺をどう思っている
んだろうな・・・

「聞いてますか?続けますよ?」

「ああわりい、続けてくれ」

「聞いててくださいね?次は種族についての説明です。
先ほどこの世界には主に6つの種族がいるといいましたね」

「ああ」

「では1つ1つの種族を説明していきます。

まずは私たちヒトです。

特にこれといった能力はありませんが、手先が器用でものを作るのが得意な種族です。

次はエルフです。

エルフは森の民とも呼ばれ、魔法を得意とし、魔力が多い種族です。

また、風の精霊に好かれやすいという特徴を持ち、風の魔法が得意な人が多いです。

その次はドワーフです。

ドワーフもエルフと同じく森の民ともよばれていますが、魔法は苦手で力が強い種族です。

また、土の精霊に好かれやすく、ドワーフが作った武器は土の加護を受け、

長持ちしやすいという特徴をもっています。

その次は竜人です。

竜人は竜が時の流れに合わせてすごしやすいように体を変えた種族と言われており、

山の中にすみ、魔力がない代わりに強い力を持ち、竜人特有の能力をもつといわれています。

竜人は様々な属性に分かれており、属性によって、火の竜人、水の竜人と分けるそうです。

そして冥族です。

冥族の発祥は不明なのですが、古代文献の多くには、気が付いたらそこにいた。と書かれています。

闇の精霊の加護を強く受けており、強力な闇の魔法を使いこなしますが、

それ以外の属性の精霊には嫌われており、闇以外の魔法を使うことはできません。

また、夜の民とよばれており、夜になるとより力が強くなるとの

「ことです」

「冥族ってというのはアンデットなのか？」

「アンデットというのはそういう種族のモンスターで、冥族にアンデットと言うのは禁句で、

仮に言ってしまった場合その場で殺されてしまっても文句は言えないので

決していわないようにしてください」

「・・・聞いといてよかったよ」

「ですね・・・」

そして最後は獣人です。

獣人はその名の通り、獣たちが人の形をとったもので、非常にたくさんの種類にわかれています。

元になったものがなんであるかでそのあり方が大きく変わるのでまとめては言えません。

一番数が多いといわれる猫が元になった猫人は、魔法が使えない代わりにすばしっこくそうです。

以上で種族についての説明を終わります」

「ありがと。他に聞いておくべきことはあるかい？」

「そうですね・・・お金の価値ってわかります？」

「わかんねえ」

「そうですね。ではお金についても説明したいと思います。

この世界の通貨はニルで、銅貨、銀貨、金貨、白貨、黒貨の5つ

のお金があります。

銅貨が100で銀貨1つ、銀貨100で金貨1つ、金貨100で白貨1つ、白貨100で黒貨1つになります。

価値は・・・確か普通に暮らすなら1日銀貨10個くらいでよかったです。」

「なるほどね・・・んじゃこの近くの事を教えてくれないか？」

「はい。いま私たちがいるのはフェレルシアの南の国境近くで、この街道をこのままいくと、

ルクセリアとの国境に位置する町につきます。^{ジェニス}ジェニスは比較的大きな町で、

国境にあるだけあり人の流通が激しい街です。

レンさんもここにつけばこのことがもつとよくわかると思いますよ？」

「そうなのか・・・ミリアはなんでジェニスに向かってたんだ？」

「一応第三王女とはいえ姫なので街の視察に向かっていたんですよ・・・まあ今回の事件で視察は無しでしょうけど・・・」

「あ・・・わりい・・・」

「いえ・・・」

「・・・」

やべえ・・・気まずい・・・

「あ、んじゃさー！この道を逆に進むとどこに着くんだ？」

「えつとですね、この道は途中いくつかの街の中をとおりますが、最終的には王都につきます。」

8日前に王都を出てここまで馬車で・・・

「あ・・・」

「・・・」

き・・・気まずい・・・!

・・・

side ミリア

駄目です・・・あのことに近い話題が出ると気まずくなるとわかっていても

どうしてもあの事を思い出してしまいます・・・

突然近くの森から出てきた賊・・・

騎士たちに絶対に馬車から出るなど言われたこと・・・

騎士たちと賊の戦いの声・・・

戦いの音が止んだ時の希望・・・

知らない人が入ってきたときの恐怖と絶望・・・

外で騎士たちと賊の死骸を見たときの悲しみと虚無感・・・

全部まだ残ってます・・・

でも全部忘れなきゃ・・・

レンさんがいるから薄れているけど・・・

もしレンさんがいなくなったら・・・私・・・恐怖と悲しみで潰れ
そうです・・・

第四話 異世界を知る（後書き）

えー・・・今回のあとがきは会話は無しです。

皆さん読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2446ba/>

異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ...

2012年1月7日00時51分発行